

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成23年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	35
-------	-----	----	----

推進校名	山口県山口市立德佐小学校	研究主題	Ⅱ型
------	--------------	------	----

○ 推進校として実施した研究内容

1 重点課題への取組状況

今年度は、新学習指導要領の完全実施を踏まえ、「確かな学力」を育成するために、以下の内容に重点を定めて研究を推進した。

- 基礎基本の定着
- ◎ 言語活動の充実(国語科を中心として)
- 家庭や地域との連携

(1) 基礎基本の定着

各教科の年間指導計画を作成すると共に、評価規準表も作成した。これに則って、各教科、特に国語科で身に付けなければならない内容を明確にし、学年の発達段階に応じて、よりきめ細かな指導を行った。

(2) 国語科における言語活動の充実

国語科の授業づくりをするときに、次の2点を共通認識のもとに実践を行った。

- 付けたい力を明確にすること。
- 付けたい力にあった言語活動を仕組むこと。

年間計画に基づき、全ての教員が国語科の授業公開を行い、その後、指導者を交えた研究協議を行った。中でも11月4日には、文部科学省の水戸部修治教科調査官を指導者として迎え、本校の取組に対する的確な指導を得た。

(3) 家庭や地域との連携

夏休み明けに、各家庭に「家庭学習の手引き」を配布した。内容は、家庭学習の取り組み方や低中高学年ごとの学習内容例を示したものである。また、7月から月ごとにテーマを決め(例えば「早寝・早起き・朝ごはん」「ノーテレビ・ノーゲーム」など)家庭での過ごし方について、保護者への啓発活動を行いながら、家庭と連携した取組の強化を図った。

2 調査研究の成果及び今後の課題

(1) 研究の成果

① 国語科の授業づくりについて

今年度は、国語科を中心として、言語活動の充実に関する研修に取り組んできた。その中で、特に国語科の授業づくりで大切にすることは、

- 付けたい力を明確にすること
- 付けたい力にあった言語活動を仕組むこと

である。このことを指導案の中にきちんと位置付けることによって、実際に指導する際に自信をもって指導に当たることができた。

また、特に本研究で「単元を貫く言語活動」とはどのようなものを明確にすることができた。文部科学省教科調査官の水戸部修治先生の理論を中心として、授業実践を試み、本校が考える言語活動を明確にすることができた。

具体的には、単元構成において、まず第3次にどのような活動を仕組むかが重要である。本校の実践から言えば、1年生の「じどう車くらべ」では、「マルマルモリモリじどう車ずかん」を作り、保育園児に紹介しよう、4年生の「アップとルーズで伝える」では、「仕事リーフレット」を作って、地域の人々に紹介しよう、5年生の「大造じいさんとガン」では、朗読（劇）を作って、お互いに交流しようなどである。そのために、第2次でどのような学習活動をし、そして、第1次の単元の導入で、どのように子どもたちの意欲化を図るかが大切になってくるのである。

さらに、単元を貫く言語活動には、第2次の学習が重要である。例えば、5年生の「大造じいさんとガン」においては、第3次の朗読劇の発表に向けて、一時間一時間の授業の中で「朗読を作る」活動を位置付けることが必要である。つまり、授業の後半部分で本時に学習した（読み取った）ことを一人ひとりが朗読に結びつける活動があるのである。その積み重ねをしていくことが、単元を貫く言語活動になる。

② 自己表現できる子どもについて

本校の研究主題「一人ひとりが主体的にかかわり、自己表現できる子どもの育成」については、各授業やその他様々な教育活動の場を通して、実践研究に取り組んできた。授業においては、1年生が自分が作った図鑑を保育園児に読み聞かせを行ったり、5年生は「大造じいさんとガン」の朗読劇を全校児童や保護者の前で発表したりすることができた。常に、他者を意識しながら、自分の思いを表現することの意識を子どもたちなりに感じ取ることができた。また、各学年が創意工夫して、全校児童前で発表する「全校集会」を実施したことにより、みんなの前で発表することへの抵抗感も少なくなってきた。

③ 家庭や地域との連携について

2学期より「家庭学習の手引き」を全家庭に配付したり、学校運営協議会やPT

Aと協力して「子どもの笑顔・元気がいっぱいキャンペーン」を毎月実践したりしたことにより、家庭学習の習慣化や基本的な生活習慣を確立するための意識付けはできた。家庭や地域と協力することの大切さを改めて認識することができた。

(2) 今後の課題

① 国語科の学力テストより

2月上旬に2年生から5年生まで国語の学力テストを実施した。(標研式CDT日本標準)その結果をみると、平均正答率が全学年とも全国平均を下回っている観点は、「読む能力」であった。その中身を分析してみると学習指導要領(国語編)の「読むこと」の指導事項の中の「自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」が該当する点である。ここは、本校の研究の視点である言語活動と密接に関連するところでもあり、今年度の研究をより一層充実・深化していかなければならない点であると認識している。

また、今後は国語科のみならず他の教科においても言語活動の充実を意識した指導に心がけていく必要がある。

② 児童アンケートより

本年2月に実施した児童アンケートの中で、「授業が楽しい」と回答した児童は70%であった。この数値は決して満足のいく値ではなく、我々教師に突きつけられた課題である。今年度は国語科を中心に授業改善に取り組んできたが、他の教科においてもさらなる授業改善を図っていく必要がある。

具体的には、児童が真に「わかる・できる」喜びを体感できる授業にするために、学習指導要領に示されている指導内容(基礎・基本)を確実に定着させること、児童の主体的な学びをより高めるための学習意欲を向上させることに重点を置いて指導する必要がある。

また、共に伸びる学習集団として、他者を理解し、温かい人間関係を構築するための学級経営上の課題にも留意しながら取り組むことが重要である。

③ 教師の授業力向上について

今年度は授業研究を中心として、一人一授業提案の実践をしてきた。その際の事前検討や事後の研究協議に時間を確保できないのが実情である。そこで、その時間を確保することや夏休みを中心に授業力を向上させるための研修を充実させる必要がある。そのことが、子どもたちの学力を向上させる方途の一つでもある。

最後に、今年度本研究の指導助言をしていただいた水戸部修治先生をはじめとする多くの指導者の先生方、中間発表会にご参会くださった各校の先生方、また常に児童の成長を温かく見守ってくださった保護者や地域の方々に心より感謝申し上げます。